

# 飼い主探し命のリレー

広島市動物管理センター（中区）の犬舎を出た1頭の黒っぽいシーズー1。飼い主の都合で同センターにいた10歳の犬は、新たな飼い主に巡り合った。おせん立てしたのは、センターと連携するボランティア団体「ハウス・ハート」だ。

（石川昌義）

「主人が亡くなり、さみしくなつて」と広島県府中町の主婦——さん（64）が先に飼っていたのと同様として引き取った。立ち会った同団体の女性メンバー（45）佐伯区は「優しい性格の犬、一緒に年齢を重ねてくたさいね」と話しかけた。

39・4％。広島市動物管理センターでの2008年度の犬の殺処分率。全国平均は75・8％（07年度）。迷い犬や飼い主が持ち込んだ345匹のうち209匹が生き永らえた。広島市の殺処分率は中国地方の自治体で最も低い。

大半の自治体は、飼い主探しの機会を施設主催の譲

## 広島市動物管理センターとボランティア



渡会に限られている。しかし、子獣医師(29)は「収容能力の超過を理由に殺処分するケースが激減した」と話す。ボランティアの個人や団体に犬猫をいったん譲渡し、引き取り手探しの協力を得ているのだ。「ハウス・ハート」はその一つである。

中国地方では初の取り組み。同センターの兼重裕美（ウエ・ハート）。メールや

センターに登録したボランティア4人でつくる「ハウス・ハート」。メールや

## 犬の処分 大幅減

ホームページで情報発信し、引き取った動物には予防接種や避妊、去勢手術を施す。費用は寄付やフリーマーケットの利益を充てる。しつけ相談などのフォローも欠かせない。

広島市がボランティアとの連携を始める契機は、06年に表面化した。ひろしまドッグは「問題犬」だ。経営難で閉園した佐伯区湯来町のレジャー施設に、多数の衰弱犬が残された事態。運営業者への改善指導の不徹底など、行政の不作為も波及された。

ペットブームのひずみに直面し、行政の対応は変わった。自己都合で犬猫の処分を依頼する人々に、センター職員は厳しい言葉で「責任」を問う。

「家族の一員のペットを『鳴き声がうるさい』『大きくなった』と手放す人もいる。命をモノ扱いする人には考え直してもらいたい」と兼重獣医師。すぐには引き取らず、まず自分で引き取り手を探すよう促す。

「殺処分減」の輪は広島市、広島、高根両県もボランティアとの連携を始めた。広島市動物管理センターの廊下には、新たな飼い主一家に寄り添う犬や猫の写真が並ぶ。それはペットと人間の幸せな関係を探しているようだ。

新たな飼い主の上村さん(右)と仲間に出会った黒っぽいシーズー。引き渡す兼重獣医師(中)も「ハウス・ハート」の会員も笑顔だ  
(広島市動物管理センター)